分科会	小6年①	郡市名	岡 崎
提案者	岡崎市立三島小学校		丸 尾 健 太

１　研究主題

社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわりながら問題解決を図る社会科の授業
―６年「１５年戦争と岡崎市民の思い」の実践を通して―

２　はじめに

岡崎市社会科部では、「社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわりながら問題の解決を図る社会科の授業」のテーマで授業研究に取り組んで４年目を迎える。昨年度の研究では、「地域の人たちとかかわりながら、社会に参画していこうとする子どもの育成」を課題にし、美合学区にある東部給食センター跡地にできる理想の公園について話し合った。数十年にわたって要望を出し続けた結果、丸岡新橋が完成したことをモデルに、跡地にできる公園を様々な世代にとっての理想の公園にするためにはどうすればいいか考え、動き出そうとする姿を見ることができた。

過去の実践の成果と課題から、今年度は「歴史学習で学んだことを基に、社会事象に対して自分なりの考えを持ち、社会に参画していこうとする子どもの育成」を課題として、４年次の研究を進めた。

３　研究の基本的な考え

（１）　研究単元の設定理由

三島学区は、昭和２０年に起きた岡崎空襲で三島学区にある東岡崎駅付近は大きな被害を受けた。終戦から７０年が過ぎた現在、戦争の跡はほとんど残っていないように思える。しかし、学区を見渡してみると、安心院には、焼夷弾が落ちた穴があったり、隣接する六所神社へ続く防空壕の跡が残っていたりする。さらに、学区には戦争を体験した人もおり、直接話が聞けることもわかった。そこで、子どもたちに、地域に残る戦争の跡を手がかりとして、岡崎市民（当時の岡崎市に住んでいた人々※本学区を含む）の思いに迫る学習をさせたいと考えた。また、調べ学習や体験学習を取り入れることで、戦争に対する自分なりの考えを構築し、学習したことを基に、自分たちが生きるこれからの未来が平和であり続けるためには、どんなことができるか考え、行動に移そうとする子どもを育成できると考え、本単元を設定した。

（２）研究主題のとらえ

本研究では、研究主題「社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわりながら問題の解決を図る社会科の授業」を次のようにとらえた。

●社会に参画していこうとする子ども

「社会に参画していこうとする子ども」とは、身近な社会的事象を自分事としてとらえ、そこから問いを見つけ、その問いを解決するために追究活動を通し、自分ができることは何かを考え、動き出そうとする子ども、ととらえる。本研究では、空襲によって焼失した三島尋常高等学校を手がかりに、調べ学習や体験学習を通し、戦争に対する自分なりの考えを構築し、未来の平和のために何ができるかを考え、行動しようする子どもの姿と考える。

●仲間とかかわりながら

「仲間」とは、共に学び合う学級の子どもたちだけでなく、学びを通してかかわる人たち全てを含めたものととらえる。即ち、「仲間とかかわる」とは、「学習の対象となる人の話を聞いたり、資料を読み取ったりすること、そして、その調べを基に友達と話し合ったりすること」ととらえる。本研究では、岡崎空襲における三島学区の被害をきっかけに、１５年戦争が始まった経緯や戦争による生活の変化、その時の市民の思いを考えることで、戦争に対する自分なりの考えを練り上げ、それらの学びを基に、未来の平和について話し合いを行う。

●問題の解決を図る

「問題の解決を図る」とは、「子どもが社会事象に出会ったときに生じる課題を、追究や話し合いにより解決していくこと」ととらえる。本研究では、戦争に対する当時の岡崎市民の気持ちを、体験活動を通して追究していく。そして、自分の思いを語ることができなかった当時の市民の気持ちを基に、自分の未来についての考えを構築していくことと考える。

（３）目指す子ども像

１５年戦争の始まった経緯や戦争による生活の変化を調べ、当時の岡崎市民の思いに迫っていくことで、戦争に対する自分なりの考えをもち、未来の平和のために何ができるかを考え、行動に移そうとする子ども

（４）研究の仮説

目指す子ども像から次のような研究仮説を設定した。なお、波線部の数字は手だてと対応している。

仮説１　①子どもたちにとって身近な社会事象を教材化し、②③当時の岡崎市民の思いに迫っていけるような資料や活動を、意図的に提示したり、単元に組みこんだりすれば、子どもたちは戦争に対する自分なりの考えを構築することができるだろう。

仮説２　④自分たちが考えたことや感じたことを伝え合い、⑤追究活動で学んだことを基にした話し合いの場を設定すれば、子どもたちは友達の考えに共感したり、自分の考えを修正したりしながら自分の考えを深めていくことができるだろう。

（５）研究の手だて

仮説１に対する手だて

①　三島尋常高等学校（白亜の校舎）と安心院の戦争跡の教材化

・単元の導入に、岡崎空襲で子どもたちが通う三島小学校が焼失したことと、空襲で被害が出なかった安心院を取り上げることで、子どもたちの学習意欲を高める。

②　戦時中の岡崎市の様子がわかる写真やグラフなどの資料の読み取りと年表作り

・戦時中の日本、岡崎市、三島学区でどんなことが起こったのかをつなげて考えることができる年表づくりを行う。また、それに合わせて、当時の様子がわかる写真やグラフ資料を提示する。

③　戦時中の岡崎市民の思いに迫るための調査活動の工夫

・当時の岡崎市民の思いに迫っていけるように、実際に戦争を経験した方に聞き取りを行う。また、戦時中の食べ物である「すいとん」を作って食べる活動を実施する。

仮説２に対する手だて

④　資料の読み取り、体験や聞き取りから思ったことを話し合う場の設定

・子どもたちが考えたことを伝え合うことで、新しい気付きや疑問が生まれ、戦争に対する自分なりの考えを構築していく。

⑤　「自分たちが生きる未来の社会の平和について」の話し合い

・追究活動を通して、子どもたちがもった戦争に対する自分なりの考えを基に、未来の平和が続いていくためには何ができるか話し合いを行う。

（６）抽出児童の設定

児童Ａ（以下＿＿＿＿＿部）は知識が豊富で、社会科に対する意欲は高い。しかし、話し合いの場では、自分の考えを発表することが苦手である。単元を通して、仲間に自分の考えを伝え、教科書や本で明らかにできない当時に生きた人々の思いに迫り、自分たちがこれから生きる未来について考え、行動に移そうとする姿を期待する。

（７）単元の目標

①　満州事変から太平洋戦争にかけての国民の生活の変化に興味をもち、自ら進んで調べようとしたり、戦争経験者の話を聞こうとしたりする。（社会的事象への関心・意欲・態度）

②　調べ学習や戦争経験者の話から思ったことを、仲間と話し合う中で、戦争の原因や生活の様子について、自分の生活と比較しながら考え、学習したことを基に、未来の平和について自分なりの考えをもつことができる。（社会的な思考・判断・表現）

③　当時の岡崎市や三島学区の様子がわかる資料や戦争経験者の話などから、国民生活が変化していったことを読み取り、年表やノートにまとめることができる。（観察・資料活用の技能）

④　国全体で戦時体制が強化されていったことや、戦争によって国民は大きな被害を受けただけでなく、様々な国に大きな被害を与えたことを理解することができる。（社会的事象についての知識・理解）

４　計画（１３時間完了）

・学習内容〇資料	子供の意識の流れ・学習課題	教師の支援
①問題発見・把握 ・空襲 〇時代ごとの三島小学校の写真 〇峯沢さんのお話 〇岡崎空襲についての被害状況・空襲の様子	**東海一と言われた鉄筋校舎がわずか２０年で使用できなくなったのは、なぜかな ①** どうして、戦争が起きたのかな　／　空襲についてもっと知りたい **岡崎空襲で三島学区はどんな被害を受けたか調べよう ②** 三島学区はとても被害を受けた　／　三島小も空襲で焼けてしまった	・鉄筋校舎の尋常高等学校を含む５枚の三島小学校の写真を提示して、時代順に考えさせる。　…手だて① ・戦争について興味を高めるために、岡崎空襲における三島学区の被害状況や空襲体験者のお話を資料として提示する。　…手だて②

○安心院の焼夷弾の穴
○六所神社の防空壕

②問題への予想
・満州事変
・日中戦争
・国際連盟脱退
○世界恐慌から満州事変までの拡大年表

③資料の収集・選択
・戦時体制
・配給制
・集団疎開
・第二次世界大戦
○終戦までの拡大年表
○学童勤労動員一覧・菅生川の芋掘りの写真金属供出の様子と証明書
○出征を見送る人々の写真
○戦争体験者のお話
・ポツダム宣言
・終戦
・原子爆弾

④価値判断
○世界恐慌から終戦までの拡大年表

学区に戦争の跡は残っているのかな ③④
こんな暗そうなところに毎回逃げるはいやだ。
どうして日本は戦争をすることになったのかな
日本が１５年戦争に進んでいった流れを年表でまとめよう ⑤⑥
世界的に不景気だった
満州に進出しようとしていた
失業者が多かった
人々はなぜ日本の国旗をふっているのかな ⑦
何かいいことがあるのかな
米やまゆの生産が増えているよ
まゆの値段が上がると作っている人ももうかるね
本当にくらしはよくなっていったのかな
当時の人々はどのような生活をしていたのかな
日本が 15 年戦争に進んでいった流れを年表にまとめよう ⑧⑨
生活用品が配給制になった
戦争に協力するための法律ができた
昭和 18 年から 20 年にかけての岡崎市民はどんな気持ちで生活していたのかな ⑩
我慢するしかない
日本は戦争に勝つと信じている
戦争なんて嫌だ
当時の市民はどんな気持ちで「すいとん」を食べていたのかな ⑪
これを食べていたことに驚きだ
栄養不足で病気になってしまう
当時、どんな思いで生活していたのか聞いてみたい
戦争を経験した方のお話を聞こう ⑫
想像以上に大変な思いをしていた
自分の考えを言ってはいけなかった
また、同じことが繰り返されないようにしなければいけない
戦争について自分の考えを発表しよう ⑬
戦争は人々の生活を奪うもの。絶対に起こしてはいけない
戦争は、お互いに大きな損害を受けるもの。残酷なこと。
また、同じことが繰り返されないようにしなければいけない
戦争があったことを忘れない
お互いの考えを尊重し合っていく

・空襲の激しさを実感させるために、安心院と六所神社の防空壕跡を見学する。 …手だて①
・全国の動きと岡崎市の出来事を関連付けて考えさせるために、第一次世界大戦から満州事変までの拡大年表を学級全体で作成する。 …手だて②
・15 年戦争の始まりとして満州事変の意味を考えさせるために、「こんなに生活が苦しいのに、戦争を応援している人たちってどう思う」と問いかける。 …手だて④
・国民生活の変化について一人調べを行い、調べたことを学級全体で共有させるために、一人調べでわかったことを年表に付け加えていく。
・年表を作成した後、「当時の市民がどんな気持ちで生活していたのかな」と問いかける。 …手だて④
・当時の人々の貧しさにより迫るために、戦中の食事づくりの体験活動を行う。 …手だて③
・子供たちが想像した当時の人々の思いを出し合った後、「本当に当時の国民はそのようなことを考えていたのかな」と問いかけ、戦争経験者の話を聞く活動につなげていく。 …手だて④
・学区に住む戦争を体験した方にお話を聞く。 …手だて③

・学習したことを根拠に自分の言葉で戦争について説明する時間を設ける。
・未来の平和について考えさせるために、「平和が続いていくためには自分たちはどんなことができるのかな」と問いかける。 …手だて⑤

５　研究の実際

（１）　東海一と言われた鉄筋校舎がわずか２０年で使用できなくなったのは、なぜかな（第１時）

【資料①】三島尋常高等学校の白亜の校舎

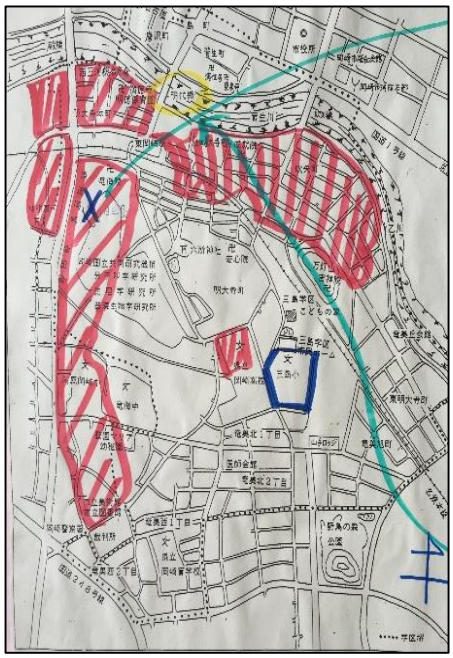
授業の初めに５枚の校舎の写真を提示し、「この５枚は全て三島小学校です。古い順にならびかえてみよう」と問いかけた。**【資料①】**子どもたちは、「これは、誠の塔があるから、今の校舎だよ」、「これはお寺っぽいから古い」などと言いながら、それぞれのグループでならびかえた順番を発表した。全てのグループの発表の後に、黒板に年代順に正解を並べると、「え？」と驚きの声が出た。子どもたちの予想と一番のずれがあったのは、1925 年に建てられた**【資料①】**の校舎と、1945 年のお寺の写真だった。そこで、当時の航空写真を見せ、今の三島小学校がある場所とは違うところにあったことを確認した後に、どうしてこの校舎がなくなってしまったのか予想を立てた。子どもたちからは、「災害」、「戦争」という意見が出た。答え合わせとして、三島小学校百年史から学校の歩みの年表を提示し、空襲で校舎の一部を残し、全焼したことを伝えた。また、その当時の時代について詳しく知るヒントとして、この校舎に通っていた人のインタビュー映像を流した。その中で、「当時は東海一と言われた鉄の校舎だった」、「岡崎空襲で爆弾が落とされた」ということがわかった。子どもたちは、戦争の被害が岡崎にもあったことに驚いたようであった。そこで、空襲の様子を少しでも理解するために、戦争体験者の方が岡崎空襲について書いた絵手紙を配り、読み取りを行った。子どもたちからは、

「六歳の少女はかわいそう」、「悲しい」、「自分だったらたえられない」といった意見が出た。授業の最後に「これからどんなことを勉強していきたい」と問うと、児童Ａは「なんで岡崎に爆弾が落とされたか調べたい」と発言した。他にも、「岡崎空襲のことを調べたい」、「日本と外国との関係はどうなったのか」といった発言が出た。そこで、岡崎空襲について調べていくことにした。

（２） 岡崎空襲で三島学区はどんな被害を受けたのか調べよう（第２時）

前時で出た三島尋常高等学校の鉄筋校舎が全焼したことを手がかりに、三島小学校の被害を調べていくことにした。ここで、学区全体の地図に、岡崎空襲で全焼した地域を赤く塗ったシートを重ねたものをグループに配った。子どもたちは、「僕の家は燃えちゃってる！」、「私の家は大丈夫だ」など様々な反応を示した。そして、その地図とシートから分かったことを出し合った。地図から分かったことは、「旧三島小は全焼した（児童Ａ）」、「吹矢町はほぼ全焼」、「学区の南東は焼かれていない」、「学区の北と西を中心に被害が大きい」、「六所神社は燃えていない」など、三島学区の被害状況が明らかになってきた。読み取りの後に、実際に岡崎空襲で亡くなった方の人数（230 人）と、その内の三島学区に住んでいた人数（59 人）を伝え、実際に三島学区に住んでいて、空襲を体験した峯澤さんの話を資料として提示した。

【資料③】の破線部からもわかるように空襲は、今でも記憶に残るくらいのものだと資料から感じた児童Ａの姿が見られた。



【資料②】岡崎空襲による三島学区の被害状況

【資料③】児童Ａの授業感想

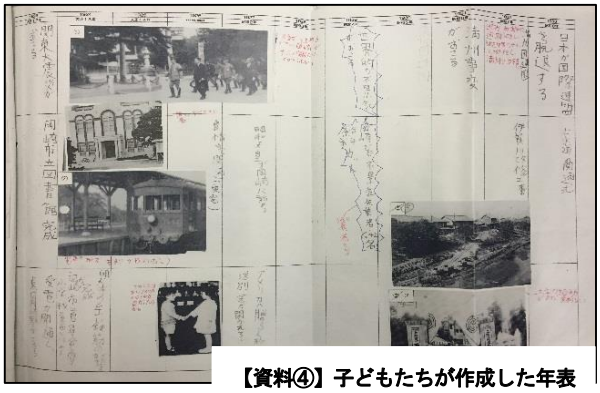
岡崎の空襲で亡くなった人のうちで約３割が三島学区で亡くなったことがわかった。三島小に合計 36 発もの爆弾が落ちたことを知って驚いた。今でも記憶に残っているくらい空襲はすごい体験だったことがわかった。

（３） 学区に戦争の跡は残っているのかな（第３・４時）

第２時の地図の読み取りの中で、学区の北と西は大きな被害があったことがわかったが、子どもたちの中で、「六所神社や安心院のところが燃えていないのが不思議」という意見が出た。その謎を解くためにはどうすればいいか尋ねると、実際に見に行けばわかるかもしれないという意見が多く出たので、安心院を見学することにした。この見学で、安心院の住職である天野さんに会うことができた。子どもたちは、岡崎空襲のことを調べている中で、安心院や焼けなかったことはどうしてかを訪ねた。天野さんによると、「戦時中は、安心院の近くに飛行機などを作る軍需工場があり、そこで働いている人が寝泊まりをしていた。岡崎空襲が起きた日は、そこで寝泊まりしていた人がすぐに消火活動をしてくれたため、燃えずに済んだと先代の住職から聞いた」と教えてもらった。また、安心院から六所神社にかけて防空壕があったことも知り、その跡地を見学することができた。さらに焼夷弾が落ちた時に空いた屋根の穴もそのまま残っており、たくさんの戦争の跡を見つけることができた。

（４） 日本が１５年戦争に進んでいった流れを年表でまとめよう（第５・６時）

見学を通して、子どもたちは、戦争がなぜ起きたのか疑問をもった。そこで、日本が戦争へと進んでいった流れをまとめていくことにした。ここで、年代と日本、岡崎市、三島学区のそれぞれの様子を書き込める大きな年表を配った。日本の様子は教科書と資料集から読み取りを行い、岡崎市や三島学区の様子は、当時の様子がわかる写真や工業生産額のグラフなどの自作資料を提示した。まず、前単元の終わりの第一次世界大戦の大戦景気から、米騒動、世界恐慌までの日本の様子をまとめた**【資料④】**。日本の様子をまとめた後に、岡崎市や三島学区の



【資料④】子どもたちが作成した年表

様子がわかる資料を提示したが、子どもたちはあることに気付いた。それは、例えば、大戦景気で都市部の景気が良くなると、岡崎市も同じように景気が良くなっていることである。児童Ａは、**【資料⑤】**の破線部①からわかるように、日本全体で起きたことは岡崎市にも影響があることを理解することができた。児童Ａは、日本と岡崎の影響についてだけでなく、破線部②から、不景気と戦争の関係性について何かあるのかもしれないと予想していることがわかる。そこで、次時で１５年戦争の始まりである満州事変が起きた時の岡崎の様子を見ていくことにした。

【資料⑤】児童Ａの授業感想

①好景気や米騒動、不景気は岡崎も影響を受けていることが分かった。また、人形の送別会があったことから、このころまだアメリカとも仲が良かったのかなと思った。②不景気になった日本は、今後どのように解決するかが知りたい。１５年戦争と日本が不景気になったことと関係があるのかが知りたい。

（５）　人々はなぜ日本の国旗をふっているのかな（第７時）

本時の最初に１枚の拡大写真（戦争祈願の市中行進の写真）を提示した。前時までの年表づくりで様々な写真資料を読み取っている子どもたちは、提示した写真から「なぜ日本の国旗をふっているのかな」という学習課題を設定した。当時の社会状況を理解するために提示した岡崎市の物価の変化と米と繭の生産額のグラフの読み取りについては、子どもたちは、「二つとも 1929 年から 1930 年にかけてグラフが下がっている」や「二つのグラフの下がり方が似ている」と二つのグラフを比較しながら読み取ることができた。しかし、児童Ａの授業感想の破線部や資料のＣ３やＣ６、Ｃ７の下線部からもわかるように、グラフの読み取りだけでは、不安という言葉は出てきてはいたが、それよりも戦争が始まれば生活が豊かになるという期待の方が強く、岡崎市民の思いを表面的にしか捉えることができなかった**【資料７】**。

【資料⑥】人々はなぜ日本の国旗をふっているのかな

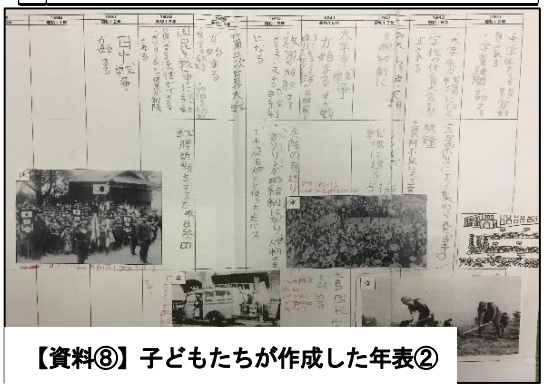
T	この上がっているグラフと写真って何か関係あるのかな。あるとしたらどんなことかな。近くの人と話してみよう。
T	では、教えてください。
C1	戦争に勝って賠償金をもらったから。
C2	わざと戦争を起こして、また賠償金をもらおうと思っている。
C3	前と同じように好景気になってほしいと考えている。
C4	戦争が起こると好景気になるので、がんばってきてほしいという気持ちでふっている。
T	何か戦争に対して期待していたとすると、どんな気持ちで旗をふっているのか考えてみよう。
C5	もう一度好景気になってほしいと思って旗をふっている人もいるけど、自分の家族は無事でいてほしいと思っている。
C6	勝ってほしいけど、不安に思っている。
C7	前、買えなかった物を買おうと思っている。
T	今後はこれから人々の生活がどう変わっていくのかみていきましょう。

【資料⑦】児童Ａの授業感想

戦争で勝てば、お金や食べ物などが手に入れることができて、生活が豊かになるから、今は苦しくても、後で楽になれると思って旗をふっていると思う。

（６）　日本が１５年戦争に進んでいった流れを年表でまとめよう（第８・９時）

１５年戦争の始まりである満州事変を学習した子どもたちは、実際に日本全体、岡崎市、三島学区の状況を年表の続きにまとめていった**【資料⑧】**。まとめていく中で、当時の市民は生活が豊かになると期待していたとは違って、太平洋戦争が勃発し、戦争が長引いたことを知った。また、法律によって配給制により生活用品が手に入らなくなったり、子どもたちが学童疎開をしたり、安心院の鐘が回収されたりと、どんどん生活が苦しくなっていった現実を知った。児童Ａは前時の話し合いで岡崎市民は生活が豊かになるから応援していたと考えていたが、年表をまとめることで、生活が苦しくなっているのに戦争をしていることに当時の市民は賛成していたのか、また、戦争の祝賀パレードで本当に喜んでいるのか疑問をもつようになった**【資料⑨】**。



【資料⑧】子どもたちが作成した年表②

【資料⑨】児童Ａの授業感想

人々は戦争に本当に賛成していたのかどうか疑問に思った。また出兵する兵隊は見送られてどんな気持ちだったのかということ、祝賀パレードに参加した人は本当に喜んでいるのかも不思議だ。

そこで、昭和 18 年から 20 年にかけて岡崎市民はどんな気持ちだったかを考え、話し合うことにした。

（７） 昭和 18 年から 20 年ごろの岡崎市民はどんな気持ちで生活していたのかな（第１０時）

前時までの年表作りから、岡崎市でも配給制になったり、金属回収が行われたり、出兵したりしていたことがわかった子どもたちは、様々な立場から当時の岡崎市民の気持ちを考えた。

【資料⑩】昭和 18 年から昭和 20 年にかけての岡崎市民の気持ち		
戦争に行った人	家族	子ども
・まだ戦争は続いてほしい	・食料不足でつらい	・いつかぼくたちも
・死んだら申し訳ない（児童Ａ）	・心配、無事に帰ってきてほしい	・国のためにがんばるへいたいさんはかっこいい
・いつ終わるかわからないからいやだ	・早く終わって	・へいたいさんがんばれ
・出兵は義務だからしょうがない	・早くかってほしい	・おなかがへった
・一生懸命戦う	・こちらが被害にあったらこわい	・戦争に行きたい

子どもたちは、戦争について肯定的な思いと否定的な思いが両方あったと考えていることがわかる【資料⑩】。子どもたちの考えを出した後に、「今までの時代は不満があったら時代が変わったのに、どうして不満を言わなかったのかな」と問いかけた。そうすると、「兵隊や国のため」を思って言わなかったと考える子と、言っても仕方がないと「あきらめていた」と考える子と、不満を言うと捕まるという「法律」があったから言えなかったと考える子の三つに分かれた。教科書で戦時体制という言葉が出ていることから、本当のことを言えなかった時代だったと確認すると子どもたちは、「そんなのつらいに決まっている」や「自分だったら無理」という意見が出てきた。最後に出された意見を整理してみると、当時の岡崎市民の気持ちにも「本音」と「たてまえ」があったことを納得した【資料⑪】。しかし、実際の生活がまだはっきりしていないため、市民の気持ちはあくまで子どもたちの想像の中にとどまっている。

【資料⑪】話し合い後にまとめたキーワード	
本音	たてまえ
早く終わって	がんばれ
申し訳ない	お国のために
しょうがない	覚悟
応えん	敵を倒す
こわい	命がけ
がまん	ほこり
つらい	平気
戦争にいってほしくない	

また、これまでの年表作りで、配給制になったお米の代わりに「すいとん」を食べていたということを見つけ出していた。さらに、「すいとんっておいしいらしい」という一人調べをしてきていた子どもの意見から、当時の岡崎市民の思いにより迫っていくために、実際に「すいとん」を作って食べてみることになった。

（８） 当時の市民はどんな気持ちで「すいとん」を食べていたのかな（第１１時）

子どもたちは、「すいとん」の味に大いに期待しているようであったが、目の前に出された材料を見て、「これだけ？」と驚きの声をあげた。材料は、小麦粉、少量の塩、ほうれん草のみ。ほうれん草をゆでて、それと塩を入れたお湯の中に水でとかした小麦粉を落としていき、おもちのように固まったら完成である。子どもたちは食べる前まではわいわい楽しんでいたが、口に入れた瞬間、ほとんどの子が表情をしかめた。「まずい！」、「味がまったくない」、「おなかがふくれない」と様々な感想を漏らしていた。そこで、「これを当時の市民は毎日食べていたんだよ。どう思う」と問うと、当時の市民の生活の大変さや苦しさについて、考える姿が見られた。児童Ａは、「量は十分ではないし、毎日出たらいやだけど、食べるものがこれだけしかなかったらなれていたのかもしれない」と当時の岡崎市民の気持ちをより深く考え、本当の気持ちを確かめたいという思いをもった【資料⑫】。最後に当時の岡崎市民の本当の気持ちを知るためにどんな方法があるか子どもたちに問いかけると、「実際に話を聞いてみたい」と声があがったので、戦争を経験した人を学校に招き、聞き取りをすることになった。

【資料⑫】児童Ａの授業感想

実際に自分たちで作ってみて食べたら、あまりおいしくなかったし、十分な量ではなかった。当時の市民だったら、毎日すいとんを食べるのはいやだと思う。だけど、食べる物がこれだけしかなかったら、すいとんを食べることになれていたのかもしれない。本当はどんな気持ちで食べていたのか知りたい。

（９） 戦争を経験した方のお話を聞こう（第１２時）

保護者の協力もあり、二組の夫婦から戦争の話を聞くことができた。当時の生活や思いなど、話しにくいこともあったと思われるが、子どもたちのために話をしてくださった。子どもたちは、体験談に耳を傾け、自分が考えていた以上の苦しい生活に驚き、本当の気持ちを言えない時代であったこと、戦争がいかに悲惨なものなのかを、自分が考えたり、調べたりしてきたことと比較しながら考える姿が見られた【資料⑬】。

【資料⑬】児童Ａの授業感想

戦争中は、自分の意見や行動などは自由ではなく、国などが決めたとおりにしなければいけないと聞いて、当時の人々は、本当に苦しかったんだなと思った。また、学校のスローガンも自分を犠牲にしてでも国を守るということから、国は子どもたちにも戦争に協力させたかったのかなと思った。特攻隊の話を聞いて、当時の日本はそれだけ戦争に勝ちたい一心だったのかなと思った。戦争とは、人の命をうばうおそろしいものである。一方的ではなくお互いに与える損害も大きい。戦時中の市民は本当に苦しい生活をすることになるが、反対することは言えない。戦争は人々の命をうばうだけでなく、人々の生活をもうばってしまうものなのである。

（１０） 戦争について自分の考えを発表しよう（第１３時）

子どもたちは、調べ学習や体験活動、戦争体験者からの聞き取りを通し、当時の社会の様子を理解し、戦争とはどのようなものなのか自分なりの考えをもつことができるようになった。そこで、「戦争について、自分の考えを発表しよう」と投げかけると、今までの学習で学んだことを根拠とし、戦争についての子どもたちなりの考えが多く出てきた【資料⑭】。授業記録のＣ１からＣ５の発言の中の下線部や児童Ａの発言からもわかるように、子どもたちは、「戦争は人々の心を苦しめ、いろいろなものを失い、憎しみを生み、人々の考えを変え、お互いに損害を与えてしまうもので、やはり戦争は起こしてはいけない」という考えをもった。これらの考えを基に、まとめの段階で、「平和であり続けるためにはどんなことができるかな」と問いかけた。子どもたちは、今までのノートを見直しながら、自分にできることはどんなことかを発表した。【資料⑭】のＣ６からＣ１３の意見から、子どもたちは、過去の出来事を多くの人に伝えていこうと考えたり、戦争があったことを理解した上で外国の人と交流をしたり、今の生活のありがたさと感じたりする姿が見られた。また、児童Ａの授業感想からも、自分だけではなく相手の意見も大事にすることが、戦時中のような国がやっていることに対し、反対することが言えない社会ではない未来をつくっていくために大切なことだと認識する姿が見られた【資料⑮】。

【資料⑮】児童Ａの授業感想

平和が続いていくためには、自分と他人の意見を大事にすることと、戦争で大きな被害が出たことをこれからも忘れないことだと思う。

【資料⑭】戦争について自分の考えを発表しよう 授業記録ー部

T	今までいろんなことを調べていたことやお話したことをもとにいろいろ考えを伝え合ったと思うので全体に教えてください。
C1	戦争は人々の生活を苦しめるものだし、人々の心も苦しめるものだと思います。
C2	戦争とは、起こしてはいけないもの。今までは景気がよくなるから、戦争を起こしてもいいと考えていたけど、授業や話を聞いてから、戦争で失うものが多いので、やっぱり戦争は起こしてはいけないものだと思った。
T	続けて
C3	戦争は、憎しみを生み出すものだと思う。しかし、日本は世界の仲間入りはできなかったかもしれないし、今の平和がなかったかもしれない。
C	なるほど
T	どんどん出しましょう。
C4	戦争は、勝つためには人々の考えをかえてしまうものだと思う。
児童A	戦争とは、人の命をうばうもので、お互いに与える損害も大きい。また、国は、それぞれの利益のために国民の苦しみを考えないようになる。
T	難しいね
C5	戦争とは、ただ人々を苦しくしてしまう最悪なもの。けど、世界がそこから良くなっていくもの。そして、平和と命を考えるきっかけになるものかもしれない。
T	うん？これは戦争はいいってこと？
C5	戦争が起きてしまうことはしょうがないと思う。
T	なるほど、いろんな考えが出てきました。前と同じようにカードでまとめてみました。いろいろなキーワードが出てきたけど、じゃあ、もう一回すいとんを食べる時代になっていい？
C	（首をふる）
T	じゃあ、これから平和であり続けるためにどんなことができるかな？
T	自分の考えを発表してください。
C6	お互いに支えあうことが大切だと思います。
C7	今も昔も関係していることだと伝えていきたいです。
T	続けていこう
C8	つけたしで、わたしたち全員で多くの人に伝えて、戦争反対の意思を持ち続けるといい。
C9	人々に戦争はとんでもないものだと理解してもらって、外国人と交流したい。
T	最後だから自分の考えを出してみよう。
C10	戦争がどれだけつらいものかわかったから、今の生活のありがたさを忘れずにいきたい。
C11	みんなと少し違うけど、教育をしっかりする必要があると思う。
C12	やっぱり忘れないようにしないといけないと思います。
C13	戦争について、色々な人に考えていってもらうといいと思います。
T	いろいろな意見が出てきたね。今日で戦争の学習は終わりますが、このことを忘れずに過ごしてほしいなと思います。

６　研究のまとめ

（１）　仮説１について

単元の導入で、子どもたちにとって身近な学校を教材化し、クイズ形式にして提示した。その答えの中で、子どもたちの予想と違った事実と出会わせることで、子どもたちの中で、「なぜ？」という疑問が生まれ、これから調べていこうという意識をもたせることができた。このことから、手だて①は有効であったと考えられる。また、その後の追究活動では、戦前から戦時中の岡崎市の写真や織物生産額、物価の変化のグラフなどの資料を自作し、子どもの意識に合わせて提示し、繰り返し読み取りを行った。これにより、教科書や資料集に載っている出来事が、自分たちが住んでいる岡崎市にも同じように起きていて、影響を受けていることに気付き、戦争と当時の市民の生活のつながりを意識するようになった**【資料⑦】**。よって、手だて②についても有効であったと考えられる。さらに、子どもたちが追究活動を通し、当時の岡崎市民は、本当はどんな気持ちで生活していたのか確かめたいという思いが強くなった**【資料⑨】**。子どもたちの知りたいという思いが強くなった時に、戦争経験者の聞き取り調査を実施した。これにより、自分が想像していたことと、当時に生きていた人の気持ちを比較することによって、戦争に対する自分なりの考えをまとめることができた**【資料⑬】**。よって、手だて③についても有効であったと考えられる。

（２）　仮説２について

子ども同士の感想交流をすることによって、お互いがどのような立場で考えているのか明らかになり、そこから共通点やずれを見つけ、意見を整理することができた**【資料⑩】**・**【資料⑪】**。また、第７時のように社会の様子が変化した出来事をあえて取り上げることで、戦争によって好景気になり生活が楽になるという期待と、戦争が長引くことによってどんどん生活が苦しくなっていくという現実をつなげて考えることができ、戦争に対する岡崎市民の本当の気持ちがどうだったのかという疑問が焦点化されていった。このことから、手だて④が有効であったと考えられる。

また、単元のまとめとして設定した「未来の平和」についての話し合いでは、今と昔はつながっているという意識をもたせることができた。この意識から、戦争があったことを忘れずに今度は自分たちが多くの人に伝えていこうと考えたり、お互いの意見を大事にしたりと、自分なりの役割を認識することができた**【資料⑭】**・**【資料⑮】**。よって、手だて⑤が有効であったと考えられる。一方で、子どもたちの意見が出た時に、教師が「どうしてそう思ったのかな」や「どの資料から考えたのかな」といった切り返しを行い、子どもたちの意見の根拠をもっと引き出すことが必要であった。話し合いにおける教師の出場をどうするかという課題も残った。

５　おわりに

岡崎市社会科部では、これまで「社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわり合いながら問題の解決を図る社会科の授業」をテーマに、研究を重ねてきた。

子どもたちは、身近な社会的事象を手掛かりにし、戦争が始まった経緯や生活の変化を調べることで、戦争は人々の生活や心も苦しめ、二度と起こしてはいけないものと考えることができた。また、学習したことを基に、「未来の平和」について話し合いを行った。その中で、「戦争があったことを忘れず、多くの人に伝えていく」ことや「自分の考えだけでなく他人の考えも大事にする」ことは、今すぐには行動に移すことはできないが、子どもたちが大人になったときによりよい社会を作っていくために大切なことであり、これは**社会に参画していこうとする**姿だと言える。また、学級の仲間だけでなく、安心院の住職や、戦争について話してくれた二組の夫婦など、多くの人とかかわって学習を進めた。資料の読み取りだけでなく、そこから考えたことや疑問に思ったことを話し合うことで、自分の考えを修正しながら、子どもたちは戦争に対する自分なりの考えを構築していった。これが**仲間とかかわる**姿だと言える。追究活動を通して、戦時中は自分自身の気持ちを自由に言えなかったことを理解し、今と昔がつながっているという意識をもち、戦争が起こらないような社会にするために、自分ができることは何かを考える姿が**問題の解決を図る**姿だといえる。第13時の子どもたちは、歴史学習で学んだことと今の生活をつなげて考え、よりよい社会にしていくために行動に移そうとする姿と言えた。なかなか自分の思いが言えず、友達と関わることが苦手だった児童Ａは、この学習を終えて、社会科以外の授業でも自分から進んで友達と意見交換をしたり、自信をもって自分の考えを発表したりするようになった。

自分の考えに基づいて意思決定をし、社会の担い手として活躍できる子どもたちを育成できるように、単元構成や支援のあり方について研究を積み重ねていきたい。